

琉球弧世界遺産フォーラム

vol.13

News Letter

2019/10

沖縄の世界遺産の新たな活かし方を考える時期到来か

今年の2月に再提出された奄美・沖縄の世界自然遺産登録推薦書を受けたIUCNによる現地評価調査のスケジュール（この10月5～12日）が先ごろ公表されました。登録の成否は来夏、中国の深圳市で開かれる世界遺産委員会で決まりますが、例年5月初旬頃に提出されるIUCNの評価レポートでおおかた見通しがつくことになります。今度は登録勧告を期待したいものです。

首尾よく登録が決まれば、来年で登録20周年を迎える世界文化遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」がある沖縄は、文化と自然両方の世界遺産をもつ特異な例になります。

国内外の世界遺産に詳しく、関連著作の多い京都光華女子大学教授、佐滝剛弘さんに寄稿をお願いし、両種の世界遺産の相互活用による沖縄の世界遺産の活かし方について具体的な提言をいただきました。自然遺産と文化遺産の保全と活用に関わる縦割りの仕組みを一体的に統合した取り組みに変える転換点になるのを期待したいと思います。

ところで、文化的景観はふだん余り耳にすることのない用語ですが、この頃沖縄でもメディアで話題になるようになってきました。昨年10月、北大東島のかつてのリン鉱石採掘に関連する一連の建造物や工作物、それらが佇む風景が、「北大東島の燐鉱山由来の文化的景観」の名称で国の重要文化的景観に沖縄県では初めて選定されました。全国ではこれまで64件が選定されていて、今後も増える傾向にあります。沖縄でも近く「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林及び集落景観」が選定される運びとなり、このホットなニュースについて、今帰仁村教育委員会で文化財を担当され、今帰仁村歴史文化センター館長でもあられる玉城靖さんに、この重要文化的景観についての解説や選定に至る間の取り組みを紹介いただくことができました。なお、文化的景観の概説をコラムとして掲載しました。

この目新しい文化的景観なる文化財は、実は世界遺産条約の仕組みが生み出した概念に由来します。ある地域の自然や立地、気候のもとで人が世代を超えて社会・経済の営みを重ねるなかで形成された景観がこの文化的景観です。文化的景観から地域の環境、伝統的な暮らしや生業のありようを知ることができ、貴重な地域遺産に他なりません。沖縄の世界自然・文化遺産の活用や、有機的に関係しあう自然と歴史・文化の統合的理解、また地域遺産を将来世代に継承する取り組みにとって文化的景観は有効なツールになると思えます。

文化的景観と世界遺産の関係については、このニュースレターでも折々のテーマとして取り上げていきたいと思っています。

（琉球弧世界遺産フォーラム News Letter 編集担当記）

も く じ

- ・世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」登録を控えて
～文化遺産「琉球王国のグスク」とともに～ 佐滝剛弘
- ・「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林及び集落景観」重要文化的景観の選定 玉城 靖
- ・解説 奄美・沖縄で動き出したツアーガイドの認証制度
- ～世界自然遺産登録を間近に控えた持続可能な観光地づくりへの取り組み～ 花井正光
- ・連載 人と自然の民俗誌 第3回『芋と裸足』の話 西江重信

発行：琉球弧世界遺産フォーラム（琉球弧世界遺産学会）

ryusefo@gmail.com

世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」登録を控えて

～文化遺産「琉球王国のグスク」とともに～

佐滝剛弘（京都光華女子大学キャリア形成学部教授）

2020年、いよいよ沖縄本島北部の「やんばるの森」と「西表島」の世界自然遺産への登録の審議が、鹿児島県の奄美大島・徳之島とともにユネスコ世界遺産委員会で行われようとしている。登録されれば、沖縄県には琉球王国の遺構という文化遺産と、沖縄の豊かな森という自然遺産が共存する、日本でもたぐい稀な「宝の島」だと国際的に評価を受けることになる。

都道府県単位で見れば、東京都には「国立西洋美術館」（「ル・コルビュジエの作品群」の構成資産の一つ）という文化遺産と「小笠原」という自然遺産があるし、鹿児島県にも「明治日本の産業革命遺産」の構成資産となる「旧集成館」などの文化遺産と、日本で最初に世界遺産に登録された「屋久島」という自然遺産があるため、「同一都道府県に文化遺産と自然遺産が存在する」というのは「わが国初」ということではないが、沖縄本島という狭い一つの地域に、文化遺産と自然遺産が共存するというのは日本では最初の事例となる。

もちろん、首里城跡や今帰仁城跡などの文化遺産とやんばるの森とは直接の関連性はないと言えるが、二つの異なるジャンルの遺産を抱えることになる可能性が出てきた来年以降、私たちはこの二つを全く別の遺産だとして切り離して位置づけ続けてよいかどうかは、少し深く考えてみる必要があるように思える。

この論考で、私たちは同じ地域にある文化遺産と自然遺産をどのように捉えたらよいのか、海外の事例なども交えて考えてみたい。

一つの島に文化遺産・自然遺産がある例～スペイン・テネリフェ島～

海外で沖縄（本島の面積およそ1200km²）とほぼ同程度の規模の島で、自然遺産と文化遺産をともに持っているところはあるだろうか？ “同規模”を同じ千平方キロ台の面積1000～10000km²と規定すると、これに当てはまるのが、スペイン・カナリア諸島のテネリフェ島（面積2034km²）である。カナリア諸島は、スペイン本土から西へ1千km、大航海時代、イベリア半島から新大陸へ向かう航路の途中にあり、船が立ち寄る貴重な島々であった。豊かな自然と温暖な海洋性気候のため、現在はスペインのみならず、ヨーロッパ各地からのリゾート客であふれる一大観光地となっている点も沖縄とよく似ている。

カナリア諸島は、スペイン領とはいえ、アフリカのモロッコ、西サハラ沖に位置する。テネリフェ島、グラン・カナリア島、ランサローテ島、ラ・パルマ島、ラ・ゴメラ島、エル・イエロ島、フェルテVENTOURA島の7つの島からなり、ヨーロッパ各地から年間1千万人を超す観光客が訪れる。そのうち、最も観光客が多いのがテネリフェ島で、年間500万人近くが来島する。この島にある文化遺産が「サン・クリストバル・デ・ラ・ラゲーナ」（1999年登録）、自然遺産が「テイデ国立公園」（2007年登録）である。

地元では単に「ラ・ラゲーナ」と呼ばれる「サン・クリストバル・デ・ラ・ラゲーナ」の歴史地区は、スペインがいわゆる新世界で築いた最初の都市で、その後ラテンアメリカに数々のコロニアル都市を建設していく際の典型的なモデルとしても知られる。今もその当時の建物が多く残っており、木製のバルコニーと建物に囲まれた緑豊かな中庭が特徴である。

テイデ国立公園は、標高3,718m、スペイン領土内の最高峰であるテイデ山を中心とする火山景観を有する世界遺産である。道路は標高2,356m地点まで通じており、そこからさらに標高3,556m地点までロープウェイで登ることができる。その先、頂上に向かうためには事前に立入許可証を取得したうえで自力で登らなければならない。以前は先住民から神聖な山と崇められ「禁忌」の地となっていたが、今では気軽に標高3,500mを超す山に登ることができる手軽な登山先として多くの観光客を集めており、公園内には国営の観光ホテル、パラドールも建てられている。

片やヨーロッパにおける新世界最初の植民都市、片やリゾートアイランドに浮かび比較的登山が容易な火山というこの二つの世界遺産は、実際、欧州でも指折りのリゾート地であるカナリア諸島の中心となる島の二大観光資源であ

り、ビーチリゾートでもありながら登山と歴史散策というアクティビティが提供可能であることが、観光に与える好影響は計り知れない。どちらもテネリフェ観光に欠かせないきわめて重要な要素なのである。

イビサ島などの例

スペインの島嶼には、もう一件、自然遺産と文化遺産が共存するところがある。地中海に浮かぶバレアレス諸島で



イビサ港に停泊する大型クルーズ船およびスペイン本土との定期航路を運航する客船（2018年 筆者撮影）

番目に大きなイビサ島（面積572km²）である。別個の世界遺産ではなく、自然遺産と文化遺産の要素からなる「複合遺産」であり、フェニキアによる遺跡や中世の街並みを構成資産とした文化遺産と、主として海中の地中海固有種の花珊瑚などを構成資産とした自然遺産の両要素を兼ね備えた遺産で、「イビサ島—生物多様性と文化」（英名Ibiza, Biodiversity and Culture）という名称で登録されている。同じ一件の世界遺産ではあるが、文化的要素と自然的な要素が重なり合っているわけではなく、あくまで

別の範疇に属する遺産であるという点は、テネリフェ島と同じである。イビサ島も地中海有数のリゾート地で、1970年以降、ヨーロッパのクラブシーンをリードする特異な地位で観光客を吸引してきた島ではあるが、多様な訪問者を満足させるうえで、考古学的遺跡や「ダルト・ヴィラ」と呼ばれる旧市街の町並み、そして豊富な海草に守られた地中海随一といわれる海の美しさはきわめて重要な観光資源となっている。

このイビサ島については、2018年夏に現地でも観光の概況について、島の関係者にヒアリングした。イビサ島は、狭い島に観光客が集中し、ホテルの建設ラッシュや観光客の激増で、一般のアパートなどの家賃が急上昇し、借りることが難しいなど、いわゆる「観光公害」が起きている状況であり、イビサ市の観光当局などでは、世界遺産の文化、自然二つの側面にもっと注目してもらい、観光客が特定の地域に集中しないよう様々な策を講じつつあるとのことであった。



イビサ島の文化遺産「ダルト・ヴィラ」（旧市街）を望む（2018年 筆者撮影）

ほかにも、もう少し面積の大きな島まで含めれば、オーストラリアのタスマニア島（文化遺産「オーストラリアの囚人遺跡群」、複合遺産「タスマニア原生地域」、イタリアのシチリア島（文化遺産が「アグリジェントの遺跡地域」、「ピアッツァアルメリーナのヴィッラ・ロマーナ・デル・カサーレ」、「ヴァル・ディ・ノートの後期バロック様式の町々」、「シラクーサとパンタリカの断崖の墳墓群」、「パレルモのアラブノルマン様式建築物 チェファル大聖堂とモンレアーレ大聖堂」の計5件と自然遺産が「エオリエ諸島」、「エトナ山」の2件）などがある。

このうち、タスマニアは、オーストラリア大陸から隔絶された島で、タスマニアン・デビルなど固有の生物が進化して希少種を今も育てていることと、隔絶された島ゆえに囚人の流刑地となり、「ポート・アーサー史跡」などの遺跡が残ることとは、地理的な観点から見ると深いつながりがある。そうした視点から見れば、沖縄の固有の生物をはぐくむ亜熱帯の豊かな生物相と、中国の文化の中心地であった江南・福建地方と地理的に近く、中国との冊封関係の中で独自の琉球文化を進化させてきたこととは、決して全くの無縁ではないことも理解できる。

二つの世界遺産を持つ島として

こうした事例をもとに、あらためて、新たな自然遺産の誕生を迎える沖縄県が、現在の「琉球王国のグスク及び



今帰仁城跡 (筆者撮影)

関連遺産群」とどう結び付けていくのか、その施策が試されているように思う。沖縄も右方上がりで観光客が増加し、那覇市や宮古島、石垣島などでは、オーバーツーリズムの様相を呈しつつある。沖縄の文化の中心であり、アクセスも良い首里城やその周辺に観光客が集まるのはやむを得ないところもあるが、今帰仁城跡ややんばるの森など島の北部にも多くの観光客が訪れることで、沖縄の自然と文化の多様性がより観光客に伝わることとなろうし、八重山においても石垣島と竹富島ばかりに集中するのではなく、西表島での自然と触れ合うアクティビティ

により多くの関心が集まることで、訪問先の分散が図れないかなど、二つの世界遺産により、多様な観光客により多くの地点に足を運んでもらう契機とすべきであろう。

また、琉球の文化の根底に豊かな海と山の恵みがあることも、この際あらためて思い起こす必要がある。平地も少なく、大規模な生産に向かない琉球の地にあって、色鮮やかな色彩の衣装や工芸品が生まれ、それが近隣諸国との貿易や外交にも影響してきたこと背景にある人の手の入っていない沖縄の山里と海の類まれな自然がそうした琉球の美を支えてきたという事実は、沖縄の理解の上で欠かせない要素であろう。

「琉球王国のグスク及び関連遺産群」を必ずしも沖縄全体の観光資源として十二分に活用してきたとはいいがたい沖縄の人々が、新たな自然遺産とどう向き合い、その貴重な自然を保護しながら、どのような価値を付加していくのか、貴重な2件の世界遺産を活用しながら後世に伝える義務を負った琉球の人々の挑戦を見守りたい。

【コラム：小笠原の自然遺産と戦跡】

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」同様、島嶼に分布する固有種の生物相が評価されて自然遺産に登録された日本の世界遺産として「小笠原諸島」がある。アカガシラカラスバトやオガサワラオカモノアラガイ、タコノキなど貴重な固有種が比較的人里に近いエリアに生息しており、こうした自然に触れるエコツアーが数多く催行されている。脆弱な自然を守るために、小笠原では徹底した保護策が採られている。南島や母島の一部では一日の入場者数を厳しく制限しているほか、アカガシラカラスバトの生息地は地元の人も含め、立ち入り禁止となっている。また固有種を脅かす家猫や外来種のトカゲの一種であるグリーンアノールの駆除の仕掛けも、島のいたるところで見ることができる。小笠原は無人島の時期が長かっただけに「文化遺産」になりうる遺跡や景観は見当たらないが、森林を抜けていくツアーでは、第二次大戦時に造られた道路や塹壕の跡が散在し、自然遺産を楽しみながら、こうした歴史の残照を体感できるのも小笠原の魅力であろう。豊饒な自然と島の歴史を物語る遺産をともに楽しめる、そんなプログラムが沖縄でも実現できたらと思う。

(京都光華女子大学教授 佐滝剛弘)



父島から南島を望む (2019年 筆者撮影)



アカガシラカラスバト (2019年 筆者撮影)

「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林及び集落景観」重要文化的景観の選定

玉城 靖（今帰仁村歴史文化センター館長）

1. はじめに

今帰仁村今泊は本部半島北側中央部に位置し、世界遺産今帰仁城跡の麓の集落です。フクギ並木の屋敷林や湾曲した道路線形など、近世琉球における風水地理に基づいた景観が色濃く残されています（写真1）。特にフクギは特徴ある景観を形づくり、防風・防火などの防災機能や、屋敷に悪気流入や良気流出を防ぐ役割があると言われています。

筆者は今泊の出身で子どもの頃から良好な景観で育ちましたが、定期的な剪定や日常的な清掃を行うことが困難であることと理由で、徐々に集落内のフクギ並木が伐採されていたことからどうにか保全できないかと気になっていました。

保全へ向けた動きのきっかけは、文化財保護法改正（平成16年）によって文化的景観保護制度が創設されたことでした。

今帰仁村教育委員会では平成26年度から当該地区の文化的景観の保存と活用に向けた取り組みを進め、令和元年6月21日、国の文化審議会において「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林及び集落景観」が重要文化的景観に答申され、近く選定の運びとなりました。沖縄県内における重要文化的景観選定は、平成30年に選定の「北大東島の燐鉱山由来の文化的景観」に続き2件目になります。



写真1 集落内の街路

2. 文化的景観の定義

文化的景観は、世界遺産条約において文化遺産のカテゴリーの中の一つとなっています。日本における文化的景観は法制化されてまだ間もないこと、県内でもまだ2件だけの選定ということもあり、あまり耳にしたことは無いかと思えます。文化財保護法改正によって創設された文化的景観保護制度は下記のように定義されています。

地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第2条第5項）

見た目の景観だけではなく、過去に住んでいた方々の生活によって作り上げられてきたもので、それらが反映されて継承されてきたものであって、これが現代の文化の基礎になっているもの。歴史的な時間の積み重ねがもたらした独特の美しさとなって醸し出すものが文化的景観と解釈されています。

3. 今泊の文化的景観の特性

文化的景観選定に向けた調査では、本質的な価値を明らかにすることを目的とし、（1）自然、（2）歴史、（3）集落構成、（4）生業と生活、祭祀、伝統芸能に焦点を当て保存調査を行いました。

（1）今泊の自然

今帰仁村の南側には、本部半島中央部の連山の一画を形成している乙羽岳（標高275.4m）、西側には熱帯カルスト地形が広がっています。また、クバの御嶽周辺で見られる円錐カルストは、亜熱帯から熱帯地域によく発達しており、世界最北端の地域となっています（写真2）。なお、古生代～中生代の古い石灰岩に円錐カルストが形成される例が少ないことも併せ、極めて重要な地形です。

今泊は集落の北側にある海浜と接していることから北風が強い場所です。集落内の各屋敷は、強く冷たい北風を背に受けるように南向きに配置され、多くの屋敷が熱帯アジア原産のフクギで仕切られるなど、自然的特性に対応したフクギ屋敷林の集落景観が現在でも残されています。



写真2 円錐カルスト地形
る地元の人たちの生活の場にもなっています。

(2) 今泊の歴史

琉球に統一王国が樹立される直前、三つの小国家が並立していた三山時代、そのうちの山北を治めた山北王の居城であった今帰仁城は、三山統一や薩摩による琉球侵攻を経て廃城となるが、城跡内には多くの拝所が残され、祭祀空間となっています(写真3)。

また、今帰仁城へ物資等を運ぶために利用されていたハンタ道(パンタ道)は、散策路として活用され、現在でもその姿を残しています(写真4)。なお、今帰仁城跡は2000年に世界遺



写真4 今も残るハンタ道

産フプハサギも現在の地に移され、明治36年の集落合併、39年の分離、昭和47年の再合併を経て、今泊集落には二つの神ハサギが存在しています。また、当時集落内に掘られた井戸は、水道の普及によって、利用されなくなった現在

部では、サンゴ礁が発達し、干潮時に干出する干瀬(リーフ)及び、その内側に水深1~3m程度のイノー(礁池)が豊かな海域の景観を形成しています。字今泊の海岸は、東側にクビリ浜、西側にシバンティナ浜、北側には集落と隣接した形で東西に延びるシル浜があります。シル浜に平行して、沖合には干瀬が東西に長く延び、シル浜から約600m離れた場所にあります。干瀬から浜までの間はイノーが広がり、サンゴをはじめ様々な海の生物の棲息地となっています。また、海の美しさを出していると同時に、魚や貝などを採取す



写真3 今帰仁城跡(大隅城壁)

産『琉球王国のグスク及び関連遺産群』の一資産として登録されました。

もともと今帰仁城北側一帯にあった今帰仁ムラと親泊ムラが17世紀前半頃までに移動してできたのが現在の今泊集落です。両ムラの集落移動に伴い、今帰仁ムラの神人が祭祀の際に使用したハサギンクワーと呼ばれる神ハサギと(写真5)、親泊ムラの神ハサギの



写真5 ハサギングワ



写真6 人型の石敢當

気が逃げるのを防ぐ役割があり、防風や防潮、防火等の防災機能も含め、人工的に植栽されたと考えられます。

(4) 今泊の生業と生活、祭祀、伝統芸能

円錐カルストが広がる山地と集落の間には、かつて、今帰仁上りや年中祭祀の拝所となっている親川（エーガー）や志慶真川から水を引き、水田が広がっていましたが、社会状況の変化等によって、サトウキビ畑等へと転換を図りながら農地として土地利用が続いています。

海岸部は、イノーと呼ばれる浅瀬の海域が広がり、干潮時には釣りや潮干狩りなどの漁労活動が行われる場です。また、集落の西側に位置するシバンティナ浜は、海神祭（ウプウイミ）の際に不浄なものを海に押し流す場で（写真7）、年中祭祀との関係性が深い浜です。円錐カルストが広がる山地には、琉球七御嶽の一つであるクバの御嶽があり、年中祭祀の拝所となっています。現在も今泊集落では、沖縄固有の信仰に基づく年中祭祀が多く継承されています。祭祀は、集落の祭祀を司る女性神役である今帰仁ノロを中心に、御嶽や拝



写真7 シバンティナ浜での祭祀

所で執り行われています。集落の祭祀行事は、無病息災や五穀豊穰、海上安全祈願など、日々の生活と深い関わりがあり、山地から今帰仁城跡内、集落内、海岸まで地域全体を祭祀空間としています。豊作の感謝と集落の繁栄を願う豊年祭も集落内の拝所等で御願や奉納演舞、伝統芸能が催され、これら年中祭祀等が地域コミュニティを結びつける大切な役割を担っています（写真8）。



写真8 大道（豊年祭での棒術）

でも集落内のいたるところにその原形を留め、一部は祭祀空間の役割も持っています。

(3) 今泊の集落構成

移動後の集落は、村抱護・浜抱護という風水地理の考えが取り入れられ、屈曲した道路線形や食い違いのある交差点、石敢當（写真6）、南向きの家屋配置など、琉球国時代に発展した独特の風水地理を色濃く残しています。また、集落内の特徴ある景観を形成しているフクギ屋敷林は、風水地理の考えに基づいて、1730年代以降に計画的に植栽されました。また、屋敷抱護のフクギには、屋敷の中に悪い気が入るのを防ぎ、屋敷の外に良い

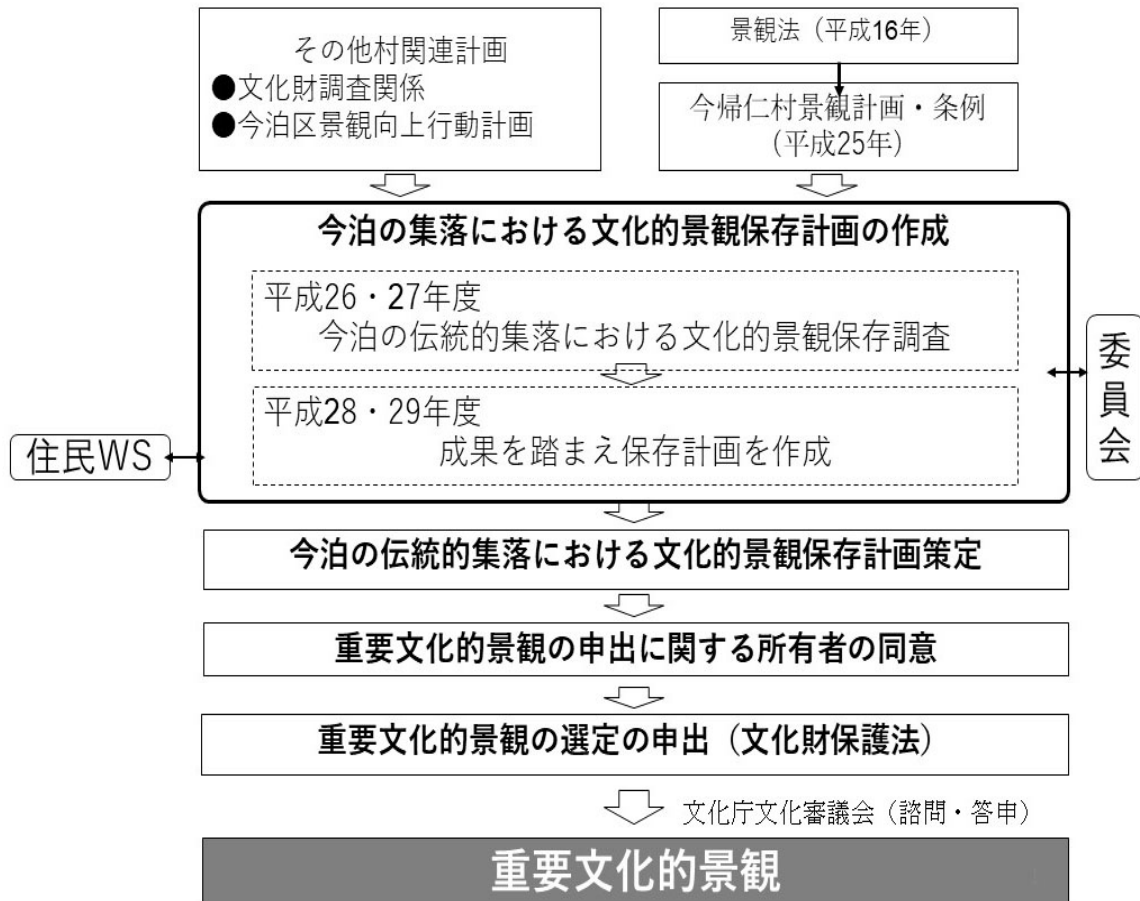


図1 重要文化的景観選定までの流れ

【コラム：文化的景観と重要文化的景観】

文化財保護法の第二条第1項第五号は、文化的景観を次のように定義しています。

地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの。

文化的景観についての概説を文化庁のウェブサイトから引用し一部改変して以下に記します。

文化的景観は、日々の生活に根ざした身近な景観であるため、日頃その価値にはなかなか気づきにくいものです。文化的景観を保護する制度を設けることによって、その文化的な価値を正しく評価し、地域で護り、次世代へと継承していくことができます。

文化的景観の中でも特に重要なものは、都道府県又は市町村の申出に基づき、「重要文化的景観」として選定されます。重要文化的景観に選定されたものについては、現状を変更し、あるいはその保存に影響を及ぼす行為をしようとする場合、文化財保護法により、文化庁長官に届け出ることとされています。ただし、通常の生産活動に係る行為や非常災害に係る応急措置等においては、この限りではありません。

また、文化的景観の保存活用のために行われるさまざまな事業、たとえば調査事業や保存計画策定事業、整備事業、普及・啓発事業に対しては、国からその経費の補助が行われます。

重要文化的景観の選定制度は、平成16年の文化財保護法の一部改正によって始まった、新しい文化財保護の手法で、平成31年2月26日の官報告示時点で、全国で64件の重要文化的景観が選定されています。

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>

解説 奄美・沖縄で動き出したツアーガイドの認証制度

—世界自然遺産登録を間近に控えた持続可能な観光地づくりへの取り組み—

花井正光（琉球弧世界遺産フォーラム代表）

1. はじめに

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」（以下、奄美・沖縄と略称する）の名称で世界自然遺産登録を目指した手続きが進行し、つい先頃、世界遺産リスト登録の可否を事実上左右する諮問機関、IUCNによる現地評価調査がこの10月5日から12日の間に実施されることが公表されました。通常のスケジュールだと来年（2020年）の5月上旬頃にはIUCNの評価レポートが世界遺産委員会に提出され、この時点で登録の成否の見通しがつくことになります。2003年琉球列島が世界自然遺産候補地に選定されて以降、長い道のりの末いよいよゴール間近まで漕ぎ着けたと言えます。

去年5月のIUCNによる登録延期勧告を受け、登録推薦書を一旦取り下げ、延期勧告の理由や追加すべき取り組みについての指摘事項に応える措置を講じて、2019年2月に再度推薦書が提出された経緯については、本ニュースレター第12号で概要を紹介しました。

奄美・沖縄の世界自然遺産としての価値を生物多様性の基準に合わせて再度推薦されたのですが、琉球列島の島々で生きながらえてきた固有の動植物たち（図1）の多くは絶滅が心配されている生きものですが、世界遺産リストに登録されるとこれらの生きものを将来世代に継承する努力を国際社会に向け約束することになります。

そこで、この資産の保全管理が大事な取り組みになるというわけです。確かな保全管理を期すには様々な取り組みを包括的に行う仕組みが必要ですが、そのうち、今回は関係地域で始まったガイド制度をとりあげ、貴重な自然を壊すことなく地域の観光資源として持続的に利用する仕組みのひとつを紹介してみます。



図1. 奄美・沖縄の島々にみる生物多様性を印象深く描いたイラスト（出典：環境省作成資料）

2. エコツアーの特色とツアーガイドの役割

エコツアーという観光のスタイルは、沖縄でもよく見聞きする体験観光のひとつですが、この旅のスタイルは1980年代に始まり世紀が変わった2000年頃にはほぼ世界中で行われるようになりました。野外での自然体験活動に観光客を案内する事業者（ガイド）がエコツーリズムの考え方に沿ってプログラムを提供する場合、そのツアー形態をエコツアーと言い、案内人をエコツアーガイドとすることにして話を進めます。

まずエコツーリズムの考え方についての説明から始めます。実は、エコツーリズムについては、「定義を行う人の数だけ定義がある」と言われるほどいろいろあって定まった定義はないのです。ツアー客の安全確保や満足度に応えることは当然大事ですが、エコツーリズムでは、地域の自然や文化の保全と継承、地域経済への貢献、地域の振興と福利向上、そして環境教育の4点に配慮したツアーであることが重視されます。ツアー客は、これらの点に配慮されたプログラムにより自然や文化に触れて楽しん



図2. NPO 法人西表島エコツーリズム協会の地域貢献に関わる活動（出典：NPO 法人西表島エコツーリズム協会作成資料）

たり、学べたりできる一方、地域の経済や活性化につながるのがエコツーリズムの考え方と言えます。1996年、全国に先駆けて西表島で発足したNPO法人西表島エコツーリズム協会の活動¹⁾に、この考え方が反映しています(図2)。

エコツアーガイドについてみると、案内する場所の自然や地域の文化を壊すことが無いのに加え、地域の経済や福祉の振興に貢献することが求められ、これに応える活動を実践するところに特色があることになります。

エコツーリズムに期待できるこれらの効果に着目して、世界遺産条約を運用する上でもエコツーリズムの普及を推奨していますし、持続可能な観光地づくりのツールとして各地で取り組まれてもいます。エコツアーガイドは、地域の優れた自然や文化の保全・継承はもちろん、地域社会の振興を担う当事者でもあり、これらに配慮した事業活動を実践するとき、ツアー客は質の高いエコツアーを体験できることになります。

注 1): NPO 法人西表島エコツーリズム協会の地域社会への貢献についての理念や活動内容が、同協会のウェブサイトで紹介されています。 URL : <https://www.iriomote-ea.com/>

3. 品質保証のための認証制度と沖縄県での経過

ある観光地でエコツアーを体験したいとき、ツアー客は観光情報誌やインターネット、クチコミ、そこかしこに置かれたパンフレット類などの媒体を情報源にしてガイドやプログラムに関する情報を得るのがふつうです。しかしながら、これらの媒体を事業者自ら作成することが多いため、社会的に信頼性の高い第三者による保証の有無を目安にできれば、信頼できるガイドや安心安全で質の高いツアープログラムを選ぶのに好都合です。

エコツーリズムの考え方やツアーガイドの役割に沿った要件を基準に、これを満たす質の高いツアーガイドやプログラムを認証する品質保証制度の適用で、ツアーの質の向上やツアー客の増加、ツアー単価の引き上げにつながり、その効果はツアーガイドとツアー客の双方のみならず、エコツアーを催行できる自然や文化が所在する地域にも波及することが期待できます。もとよりエコツーリズムは地域の振興や経済の活性化を柱に据えているからです。

一般的に、然るべき基準を伴う認証制度の導入によって、地域環境への負荷の軽減、地域社会への配慮の継続、雇用の創出・継続による地域経済の好循環の惹起、プログラム選択の視点の共有による悪質な事業者の排除の助長等々の効果が招来し、その結果ツアー客と地域住民の双方の満足度が向上し、持続可能な観光地づくりにつながるものが期待されます。

ところで、沖縄県下でエコツーリズムの取り組みが始まった1990年代後半以降、地域団体によるガイドライン

ガイドライン・自主ルール等の例	策定・運用主体	策定・運用年	摘要対象
やんばるの自然体験活動ガイドライン	沖縄県	2001	事業者・地域住民・行政・観光客
沖縄県エコツーリズムガイドライン	沖縄県	2004	来訪者・地域住民・体験観光事業者
西表島エコツーリズム協会ガイドライン	NPO法人西表島エコツーリズム協会	2002	来訪者・地域住民・体験観光事業者
西表島カヌー組合規約	西表島カヌー組合	2006	組合員(事業者)
座間味村ホエールウォッチング協会自主ルール	座間味村ホエールウォッチング協会		協会員(事業者)
沖縄県カヤック・カヌー協会認定基準	NPO法人沖縄県カヌー・カヤック協会		協会員(事業者)
宮古地域における海面の親和的利用に関する指針(ガイドライン)	宮古地区海面利用協議会	2008	観光ダイビング事業者・漁協・観光事業者
やんばる3村世界自然遺産推進協議会ガイド制度	やんばる3村協議会森林ツーリズム部会	2018	3村域内事業者・域外事業者

表 1. 沖縄県下で民間団体等により策定されたガイドライン、事業者自主ルール等の例

の策定や、特定の観光サイトを利用するツアー事業者や事業者団体の自主ルールによる一種の認証制度が運用されている例がみられます。表1にそれらの取り組みを例示しました。ガイドラインは遵守事項を掲げて構成員や関係者に取り組みを促すことで、自然環境や地元の暮らしに及ぼす負荷の軽減を図ろうとするものです。また、

ガイド事業者が任意の組合を組織し、特定行為の禁止や立ち入り員数の総数規制、救急時に対応する資格の取得などを義務化する自主ルールを運用している例もあります。これらの取り組みにより、エコツーリズムへの住民の関心を高めたり、利用サイトの自然環境の劣化の進行を抑制する効果をもたらしてはいるものの、民間団体や事業者組織による規制の強化や、より多くの関係者を巻き込む体制を整えるには限界があり、関係行政機関との連携や役割分担が課題となっています。

一方、沖縄県は全国に先駆けてエコツーリズムを取り入れ普及を図ってきた経緯があります。ガイドの育成事業(講座の開設)の実施、ガイドラインやエコツーリズム推進5か年計画(表2)の策定などを実施してきました。推進計画で掲げた8つの施策のうち、⑤の推奨制度が、品質保証制度にあたるもので、オーストラリアのエコツーリズム協会が運営する認証制度を参考に認定手法や認定主体、その実施・運用上の要件など取り扱い方針が検討されました。

しかしながら、具体的な認証制度の策定と運用には至りませんでした。

4. 動きだした新たなガイド制度

2018年度に沖縄島北部3村(国頭村・大宜見村・東村)で構成するやんばる3村森林ツーリズム協議会が発足し、初のガイド制度の運用が始まりました。続いて、つい先ごろ、西表島のガイド制度の根幹と目される「竹富町観光案内人条例」が議会で可決・成立し、2020年4月1日の施行が決まりました。条例によりツアーガイドを許可制にするものです。これを受け、エコツーリズム推進法に基づき竹富町が主催するエコツーリズム推進協議会の設置が決まり、ガイド制度に関連する仕組みなどについての全体構想の策定作業が始まろうとしています。

奄美大島と徳之島については、このエコツーリズム推進協議会が既にできていて、ガイドの認証制度も開始されています。このようなガイド制度に関する取り組みは、世界自然遺産の登録を見据えた特別理由があつてのこととしても、関係町村には、この認証制度が登録後の世界自然遺産の保全と持続可能な観光地づくりの担い手のひとつになるように、周到な制度運用体制で臨んでほしいと思います。奄美・沖縄での取り組みが他地域に波及するなら、世界遺産を地域社会の今と未来に活かす社会づくりを目指すこの条約の理念を体現するベストプラクティスとして、広く世界に知られることになるのではなか、とも思います。

5. やんばる森林ガイド制度の仕組み

沖縄島北部で運用が始まったガイド制度の仕組みの概要は次のとおりです。

世界自然遺産に推薦されるほど特別な地域を未来に継承するために、やんばる3村森林ツーリズム協議会を主体として、地域の自然や文化の保全、地域経済の活性化、持続可能な観光の促進などに寄与することを目的に創設された仕組みとされています。

この仕組みの特徴は、予め設けた要件に基づき、登録ガイドと認定ガイドを区分し、このガイドの区分と利用できるサイトの区分を組み合わせることで保全と利用のバランスを図る点にあります。図3により概説します。まず、ツアーガイドに2つの区分を設け、利用できるサイト(フィールド)も区分けされている点、認定ガイドを3村域内居住者か域内の事業者の雇用人に限定し、認定ガイドのみ「やんばるの森ガイド」という呼称が使える点に工夫がみられます。地元に住居し地域の自然や文化により詳しいガイドと域外在住のガイドの差別化には、地域振興への貢献度に応じた配慮がみられます。エコツーリズムの理念に地域振興との関わりが含まれていることに合致する措置とみてよいでしょう。

4つの区分を設けて利用サイトを特定し、サイトごとに利用ルールを設け遵守させる措置や、ツアーで利用させないサイトが設定されていること、届け出だけでガイドに限らず利用できるサイトが設けられていることなどの工夫も保護管理の手法として評価されます。他にもこのガイド制度を適切かつ円滑に運用する上での工夫がいくつもされていますが、何年か先になるこの制度の全体評価が楽しみでもあります。

**沖縄県エコツーリズム推進計画
(2003-2007)**

目標:

- ① 沖縄県体験・滞在型観光の推進
- ② 自然・文化環境の適切な保全
- ③ 地域の活性化と自立

施策:

- ① 環境への配慮と保全
- ② 魅力あるエコツアープログラムの開発
- ③ エコツーリズムの人材開発と育成
- ④ 安全対策への取り組み
- ⑤ 推奨制度の構築
- ⑥ 情報発信の新しい仕組みの構築
- ⑦ 施設整備
- ⑧ 推進体制の構築

表2. 沖縄県により策定されたエコツーリズム推進計画(2003-2007)に掲げられた目標と施策のみだし

フィールドの種類	フィールド利用要件	概要
保全フィールド(仮)	利用しない	・自然環境保全(過剰利用等)や社会背景(聖地等)等の事由から 利用しない方針 とするフィールド
限定フィールド(仮)	認定ガイド(地元ガイド)	○利用する事業者を 認定ガイド に限定し、フィールド別ルールのもとで適正な利用・管理を行うフィールド ・各村協議会(またはフィールド管理者)はフィールド保全のため 登録人数の調整、モニタリング等の管理を行い、適正利用を徹底する。
登録フィールド(仮)	認定ガイド登録ガイド(地域外OK)	○利用する事業者を 登録・認定ガイド とし、フィールド別ルールのもとで適正な利用・管理を行うフィールド ・各村協議会(またはフィールド管理者)は 登録人数の調整、モニタリング等の管理を行い、適正利用を徹底する。
オープンフィールド(仮)	ガイド登録不要	○利用する事業者を明確にし、フィールド別ルールのもとで利用促進を図るフィールド ・ガイド登録は不要だが、フィールドの利用登録は行う。 ・各村協議会(またはフィールド管理者)はモニタリングを実施

図3. やんばる3村森林ツーリズム協議会によるガイド制度におけるガイド区分と利用フィールドの区分の関係。説明は本文参照。出典: 沖縄県森林管理課(2018)

『芋と裸足』の話

西江 重信（環境カウンセラー）

- ・唐芋 栄養素と機能性成分の宝庫であることが解明されています

本号では「苦味“野の菜”」の周辺領域に分類しているカンダバア（サツマイモの葉）と芋を取り上げます。我が家ではずうっとカンダバアを食してきました。友人知人、会う人ごとに奨めてきました。カンダバアが体にいいという科学的根拠はわからなかったが口癖のように自説を話していました。

「芋と裸足」は、貧しさの代名詞のように認識されてきましたが、近年の研究により葉、ツル、茎、芋、全てが栄養成分の宝庫であることが解明されています。「芋と裸足」は貧しさの代名詞どころか健康長寿の立役者だったのです。本稿を読むにあたって、下記の“トピックス”に目を通してから一読されることを奨めます。

- ・365日 “芋” 命をつなぐ常食でした

昔の食事は朝も昼も芋、小中学の児童生徒の弁当もハンカチに包んだ芋3個でした。夕食も週に2・3食はカンダバアジュウシィ（芋の葉入り雑炊）でした。ヒゲイモと言って細くて小さな芋も上手に食していました。子どもたちの仕事でしたが、その芋の皮を貝殻で削ぎ、翌朝母親たちが大鍋で炊き、鍋の中で潰し「ウムニィ（マッシュポテト状）」にして朝食にすることもありました。味噌汁の具はもちろんカンダバアでした。カンダバアにまつわるエピソードもいろいろありますが、紙幅の都合でここではふれないでおきます。



芋の葉



オレンジ芋



紅芋



紫芋

- ・パーフェクト・ソウルフード 健康長寿の切り札として食卓に取り入れたいものです

60年も前の状況を思い出します。名護高校の寮生に「脚気（ビタミン不足による身体症状）」の学生がたくさんいましたが、芋が常食だった田舎の人には見られなかったのです。当時の田舎で生活習慣病なんて聞いたこともありません。昔の人は、朝ビタミンを摂取し、それが排出される時間帯に補って、他の栄養素も朝と昼に摂っていたのです。

カンダバアと芋を日々の食卓にのせたいですね。学校給食や高齢者施設、病院の食事にも取り入れることを考えたいですね。お年寄はカンダバアジュウシィやフウチバア（ヨモギ）ジュウシィが欲しいと言っています。子どもや若者には食育の観点でも重要な取り組みだと考えます。

- ・スーパーバイオマス 葉、茎、芋全てが人間と家畜の糧です

気候に関係なくどのような土質でも育ち、植え付けの時期も問わず氷雪地以外なら地球上どこでも栽培が可能です。

土が多少湿ったときに植え付ければ以後は放っておいても育ち、ちゃんと芋を付けるのです。驚嘆すべき植物です。葉、ツル、茎、芋は人間の食糧に、芋の皮と人間の食に適さない葉、茎は豚の餌に、また茎は牛や山羊の餌として重宝です。全く無駄なところはありません。このように人類にとって万能な農作物は他に知りません。まさしくスーパーバイオマスです。

トピックス

“スイートポテトの栄養素と機能性成分（近年の研究報告による）

葉、ツル、茎に含まれる成分 - カロテン、ビタミンB2、ビタミンC、ビタミンEが豊富。食物繊維、たんぱく質も。

芋に含まれる成分 - ●ヤラピン（食物繊維と協働で通じをよくする）、●カフェオイルキナ酸誘導体（ポリフェノールの一種で抗酸化作用、肝機能の保護、発ガン性物質の抑制）、●ビタミンA、B、C、E。焼き芋ならでんぷんで保護されるためビタミンCの減少は小さい。

◎特に注目されているのは、細胞を変質させようとする紫外線、活性酸素、放射線等の活性を抑える“防御力”を備えていることだといえます。